

<エッセイ>

島宇宙化とバズ社会がもたらすアイドルの多層化とジレンマ —「見つけてもらう」手段と「見届けてもらう」目的の狭間で— The Multilayering and Dilemma of Idols in the Age of "Islands of Universes" and "Buzz Culture" —Between the Means to Be Discovered and the Goal to Be Witnessed—

夏目志穂

Shiho Natsume

I. 導入

私は幼少期からアイドルが大好きだったが、敷かれたレールから脱線する勇気をずっと持てなかった。大学を卒業し社会人生活を送るうちに違和感が確信に変わり、当時勤めていた広告代理店を辞職して Palette Parade に加入した。

「アイドル」というものに人生を狂わされてきた私から見た、アイドル業界の変化と実態を書いていく。

II. アイドル史の振り返り

1. 中央集権的時代

私が知っているのはここ 20 年ほどのアイドルに限られるが、アイドル史における激動の時代に立ち会っている真っ只中なのではないかと思う。

私が小学生だった頃は、まだみんながテレビを通じて同じコンテンツを観ていた。音楽番組で言えば、『ミュージックステーション』『HEY!HEY!HEY! MUSIC CHAMP』『MUSIC JAPAN』『COUNT DOWN TV』などが少なくとも私の身近では人気で、家族と一緒に観ていた記憶が未だに鮮明に残っている。

当時テレビでよく見かけていた女性アイドルは、大好きだった 48 グループの他に、そのライバルという形でデビューした乃木坂 46 や、ももいろクローバーZ などを中心だったように思う。男性アイドルも同様、テレビによく出演していたのは大手芸能事務所に所属するグループだった。

これらのマスメディア露出が多いアイドルグループは、周りの友人や家族との共通言語となり、人それぞれの好みはあれど、誰もが知っているエンターテインメントであった。

私の祖父は当時「イマドキ」のアイドルを毛嫌いしており、歌番組を観るたびにぶつくさと文句を言っていたことが小中学生の私にとってはすごくストレスであったが、好きなアイドルを三世代で観る機会があるということ自体今となっては珍しいのではないかと思う。

ちなみに祖父は私がアイドル活動を始める前に亡くなったので、「イマドキ」の私の姿を見たらどんな反応をするのだろうかと考えることがある。

2. 分権的な構造へ

当時のように、マスメディアとの結びつきが強いアイドルグループに世間の興味関心が一極集中していたアイドル業界は、政治的用語を用いるなら「中央集権的」だったと言える。

しかし、インターネットの普及に伴って勃興した新しいメディアが力を持ち、マスメディアの影響力が少しずつ弱まるにつれて、中央集権的であったアイドル業界にも大きな変化が訪れている。

特定の事務所に所属するアイドルグループ以外にもチャンスが巡るようになった現在のアイドル業界は、中央集権的な構造から「分権的」な構造にシフトしていると言えるのではないだろうか。言い換えれば、権力とチャンスが分散しているということである。

Ⅲ. 分権的な構造の説明

1. 島宇宙化

アイドル業界が中央集権的な構造から分権的な構造にシフトした最も直接的な原因は、新しいメディアの普及によって、マスメディアとの結び付きが比較的強くないアイドルと出会うハードルが低くなったことだと思う。

一度ハマればどんどん自分好みにカスタムされていくタイムラインによって、自分が興味あるアイドルに関する情報だけに触れ、一方で興味のないコンテンツに関する情報は全く流れてこない。このようにして、今は一人一人が独自のエンターテインメントの世界を持っている。

これはメディア論や社会学で言われるコミュニティの「島宇宙化」そのものであり、たとえマスメディアが未だ大きい力を持っているとしても、その影響を受けることなく、自分好みのニッチな趣味を楽しみ、そのなかでの流行や競争に熱中しやすい環境が作られていった。

2. バズ社会化

さらに、マスメディアとの結び付きが人気や知名度に直結していた頃と違い、今は SNS でひとたび“バズ”を掴み取れば一躍スターになれる。

実はこの“バズ”にも仕組みがあるため、この仕組みの解明・実践を行える環境であればあるほど人気や知名度を獲得しやすいことには違いないのだが、それでもチャンスはより広く巡るようになった。

それまではマスメディアを通じてはじめて世間に知られるという仕組みだったが、今ではその関所をスキップして人々に直接届くことが可能になった。

3. アイドルの多様化

アイドル業界の島宇宙化とバズ社会化の掛け算によって、「アイドルになりたい」という夢を行動に移すハードルがぐんと下がったと肌で感じている。

なぜなら、私自身がそうであるからだ。

少なくとも私が小学生の頃は、アイドルになるためには大手芸能事務所やマスメディアなどの大きな力に選ばれる必要があった。当然狭き門であるため、若く容姿端麗で、パフォーマンス力やキャラクター性が飛び抜けていることが必要条件であった。

実は私も学生時代に AKB48 やモーニング娘。のオーディションに応募したことがあったが、別に街中を歩いていてもパッと目を引くようなビジュアルではない私が書類選考で落選したのは、全く不思議なことではない。

そんな私が、大学卒業後の年齢でアイドルオーディションに合格したことこそが、アイドルの道を歩むチャンスが広がった現状を物語っている。

これは決して、可愛くなくてもアイドルになれるようになったとか、アイドルと名乗ったもの勝ちの世の中になったとか、そういう批判的な考えを伝えたいわけではない。

本来人間ひとりひとりが持っているはずの多様な感性が、大きな力によって都合良く整えられたり、表明することを躊躇われたりすることが少なくなった今、それぞれの好みに合ったアイドルが生まれやすくなったということだ。

実際に、私よりはるかに若くて可愛いアイドルは世の中に沢山存在していて、彼女らを知る機会だって十二分にあるにも関わらず、私のような特殊な人間のことも応援してくださる方が沢山いる。そうしたファンの方々はきっと、年齢や容姿だけでは測れない価値をアイドルに求めているのだ。少し前の中央集権的な構造を持つアイドル業界のままであれば、きっと私がアイドルとしてファンの方々と出会うことは無かったと思う。

IV. 現代アイドルの生存戦略

1. 競争過程の変遷

マスメディアの影響力が弱まったことにより、大小問わず様々な需要に合わせてアイドルの在り方が多様化し、結果としてアイドルの数そのものが激増した。

しかし、人々の可処分時間は限られている。アイドルの数が増えていく一方で、世間がアイドルに対して割くことのできる時間や労力には変わらず限度があるのだ。

つまり、いくらアイドルを名乗るハードルが下がったとは言え、競争は熾烈なままである。これまでは「アイドルになるまで」の競争率が高かったのに対し、現在は「アイドルになったあと」の競争が激化しているのだ。

これは、競争への参加資格が「アイドルになる段階」で決められるのか、「アイドルになったあと」にその競争に直面するのか、という違いに過ぎない。限られた「座り心地の良い椅子」に誰が座れるかを争うゲームから、全員がひとまずパイプ椅子に座った状態で、その椅子自体のグレードアップを目指す戦いへと変化しているのだ。

2. 競争下のジレンマ

誰だって、競争に勝ちたい。真っ向勝負で勝てそうにないなら、人と違うことをして目立ってみたり、近道を探してみたくなったりすることは、いたって当然である。自分より強くて大きな何かに対峙している状況下なら尚更だ。

そんな近年のアイドルは、熾烈な競争下に置かれているばかりに、以下2つの特徴が顕著であるように感じる。

(1) ファンとの親密化

1つ目は、アイドルとファンの距離がぐっと縮まったことである。

アイドルが増えたことで「選ばれる理由」を作る必要が生まれた。その結果、歌やダンスだけでは差別化が難しくなり、“会えること”や“近さ”そのものが価値として競争力を持つようになった。

これ自体は今に始まったことではなく、AKB48がCDに握手券を付けて販売しはじめた頃からそうであったが、当時は世間からの批判も多かった。私も学生時代にお小遣いを貯めてAKB48の個別握手会に参加していたファンの一人であったため、CD販売方法に対する批判的な意見を聞くたびに「応援の形は人それぞれで良いだろ！」とムキになったものである。

それに比べて近年は「アイドルはファンと距離が近いものである」という認識が以前より世間に浸透しているように思える。むしろ握手以上の交流さえ当たり前になり、やり方次第ではアイドルとファンという境界線が曖昧になりやすい環境にもなった。

私はファンと近い距離で交流しながら活動できる今の環境が大好きで、かつ自分の性に合っていると感じる。なぜなら、自分が発信・表現したものの反応を直接知ることができ、日々の活動の手応えをファンが感じさせてくれるからである。それがファンにとっても応援の原動力になるのであれば、アイドルとファンが近い距離で交流するスタイルは、競合の多い今の時代に浸透していくのは自然なことと言えるだろう

しかし、交流が親密になりすぎるあまり、アイドルとファンという立場を超えた関係性を築いてしまうケースも近年多く見られる。ファンとの交流を通じて笑顔を届けるのがアイドルの使命であるにも関わらず、その線引きが上手くできずにアイドル性が揺らいでしまつては元も子もない。

ファンとの交流を通じてお互いのモチベーションを高めることと、一線を画した憧れの対象でありつづけることのバランス維持は、今のアイドル業界のひとつの課題であると感じる。

(2) 「画面内」のバズとライブの解離

これは1つ目と違い、TikTokが普及したここ数年で急速に高まっている傾向である。

楽曲のなかの特定のフレーズがバズると、主に若者のあいだで一気に認知度が上がり、再生回数やフォロワーが激増する。こうしてアイドルが人気を獲得するケースが珍しくなくなった現在、楽曲において、その良し悪しとは別に「バズるか否か」という新たな評価軸が生まれた。

楽曲に限らず、振り付けも同様である。私はアイドルの振り付けを研究することが趣味の一つで、自分自身もグループの振り付けを担当しているが、「手元だけでも真似して踊りやすい振り付け」が良いという縦型動画向きの評価軸はついここ4、5年のあいだに広がったものだと感じている。しかしこれにはひとつのジレンマがある。「縦型の画面の中で見栄えする曲」と「ライブで盛り上がる曲」は必ずしも同じではないというジレンマだ。

TikTokでバズっているあの曲が聴けると思ってライブに足を運んだのに、何故か披露しなくて拍子抜けした。または、ライブだからこそ聴きたい曲がもっとあるのに、TikTokでバズっている曲にライブ時間が喰われてしまってつまらない。

こんなふうに、スマートフォン越しとライブ会場のどちらでもアイドルを楽しめるようになったからこそ、そのギャップが生まれている。

画面内の2次元の世界で魅力を発揮するものが、3次元でも同様の輝きを放つかと問われれば、そうではない。

なぜなら、バズは“作品”ではなく“切り抜き”を評価する文化であるのに対し、ライブは“切り抜き”をつぎはぎして成立するものではないからだ。ライブが始まるまでの期待感、ライブを通して温まっていくアイドルとファンの熱量、そして日常生活では味わえない感情と衝動、これらをひっくるめてはじめて価値が生まれるのがライブである。

V. 知名度という幻想と、私たちが目指すべき場所

1. 目的と手段の混同

アイドルになったあとの競争が激化している今、アイドルの在り方が時代とともに変わり、それによってジレンマも生まれている。

一つ目は、ファンとの距離感を見誤り、アイドル性そのものが失われるケース。二つ目は、スマートフォン越しとライブ会場でのギャップが生まれてしまうケース。

どちらも「人々から興味関心を向けられ、アイドルとして競争に勝ちたい」という野心が原点ではあるが故に、とてももどかしい事象である。

私は、人々の気を惹くことは入り口にすぎないと思う。言い換えればアイドル活動における「手段」に過ぎないのだ。

これをアイドル活動における「目的」と混同してしまうと、私たちはただ煌びやかなオーラを纏った空虚と化してしまう。では、私たちが目指すべき「本当の目的」とはどこにあるのだろうか。

2. 「見つけてもらう」よりも「見届けてもらう」ためのアイドル活動を

とても陳腐な表現かもしれないが、「人に見つけてもらうこと」ではなく「人に見届けてもらうこと」こそが、アイドル活動の本質であると思う。

我々アイドルは、「アイドル」という肩書きを持っていることそれ自体ではなく、「どんなアイドルか」を活動の中で問われ続ける日々のなかにいる。なぜなら、“アイドルとファン”である以前に“人と人”であるが故に、肩書きひとつで長続きするようなものではないからだ。

誰でも始められる時代だからこそ、続ける理由や物語が問われる。そこに感動や共感が生まれたときに初めて、「興味」が「応援」に変わり、継続的な関係を築くことができるのである。

バズは数秒で終わる。応援は長く続く。人はバズった動画の多くを忘れてしまうが、一緒に歳を重ねたアイドルのことは忘れない。アイドルが預かっているのは視線ではなく時間と感情である。

つまり、アイドルの本質は知名度ではなく、人の時間や感情を預かり続ける営みであるということ、アイドル自身が見失ってはならないのだ。存在を人々に知ってもらった先に、人の心を動かせるステージやストーリーがあるか。それが「見届けてもらう」ための鍵であり、これを失くしてしまつては未来の扉を開けることはできない。

逆に言えば、派手に見つからなくたって、特段高い知名度が無くたって、誰かの心を強く動かしているのであれば、アイドルはアイドルを名乗って良い。

私自身も、日々の活動の積み重ねがいつの日か花開くための土台に、そして花開いた先の感動に繋がると信じて、目の前の物事へ懸命に向き合っていきたいと思う。

しかし、自分というアイドルの存在を誰かに知ってもらわないことには夢を叶えられない。「見つけてもらう」手段と「見届けてもらう」目的の狭間で、今日も沢山のアイドルが奮闘を続けているであろう。私もまた、その狭間でもがくうちの一人である。